

構造関係共通図（配筋標準図）

総則

1. 適用範囲
(1) 本構造関係共通図は鉄筋コンクリート及び鉄骨鉄筋コンクリート造等における鉄筋の加工、組立の一般的な標準図とする。
(2) 本構造関係共通図以外については、設計図及び監督員の指示による。
2. 用語の定義
(1) 設計図とは、建築構造図のうち特記仕様書（構造関係）、構造関係共通図以外の図面をいう。
(2) 異形鉄筋の径（本文、図、表において「d」で示す。）は、呼び名に用いた数値とする。
(3) 長さ、厚さの単位は、特記なき限りmmとする。
3. 優先順位
(1) 設計図書の図面のうち配筋方法に相違がある場合の優先順位は以下のとおりとする。
1. 特記仕様書（構造関係）
2. 図面 2-1 設計図
2-2 構造関係共通図（配筋標準図）
3. 国土交通省大臣官房官庁営繕部監修「公共建築工事標準仕様書（建築工事編）（令和4年版）」
4. 記号
図面を使用する記号等は、表A～表Dを標準とする。

表A 異形鉄筋の断面表示記号

区分	径	D10	D13	D16	D19	D22	D25	D29	D32
建築		●	×	∅	●	○	⊗	⊗	⊗

表B 各階伏図における記号

記号	説明	記号	説明
S ^h	スラブの配筋種別	⊗	杭の位置
◇	スラブ厚さ	⊕	試験杭の位置
○	階段の配筋種別	▨	打増しの範囲
⊙	土間コンクリート	⊞	スラブ開口
▮	コンクリートブロック壁（CBB壁）	⊗	ボーリング位置
▨	梁・スラブの上がり下がり	(土)	FLからの上がり下がり
EW○○	耐力壁の種別	W○○	一般壁の種別
EW○○	片持ちスラブ形階段を受け、かつ耐力壁の種別	KW○○	片持ちスラブ形階段を受け、かつ一般壁の種別
EW○○	土圧を受け、かつ耐力壁の種別		

表C 梁貫通記号

区分	径	50	75	100	125	150	175	200	225	250	275	300	325	350	375	400
建築		⊗	×	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+

表D スリーブ材質の凡例

管名	鋼管	溶融亜鉛めっき鋼管	硬質塩化ビニル管（薄肉管）	つば付き鋼管（炭素鋼）
記号（建築用）	SP（白帯）	GA	VU	RS

※建築用以外のスリーブ材質は各工事による。

1 鉄筋の加工

鉄筋の折曲げ内法直径は、表1.1を標準とする。

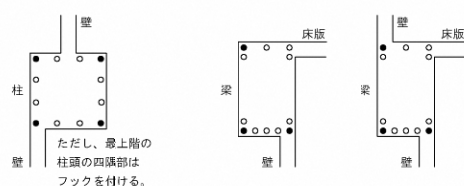
表1.1 鉄筋の折曲げ内法直径

折曲げ角度	折曲げ図（余長）	折曲げ内法直径(D)		
		S0295A, S0295B, S0345	S0390	
		D16 以下	D19 ~ D38	D19 ~ D38
180°				
135°				
90°				
135°及び90° （幅止め筋）				

1. 片持ちスラブ先端、壁筋の自由端側の先端で90°フックまたは135°フックを用いる場合は、余長は 4d 以上とする。
2. 90°未満の折曲げの内法直径は特記による。

2 異形鉄筋の末端部

次の部分に使用する異形鉄筋の末端部にはフックを付ける。
(イ) 柱及び梁（基礎梁を除く）の出隅部



- ただし、最上階の柱頭の四隅部はフックを付ける。
図2.1 末端部にフックを必要とする出隅部の鉄筋（●印）
- (2) 煙突の鉄筋（壁の一部となる場合を含む）
(3) 杭基礎のベース筋
(4) 帯筋、あばら筋及び幅止め筋

3 継手及び定着

- (1) 鉄筋の重ね継手
(ア) 径が異なる鉄筋の重ね継手の長さは、細い鉄筋の径による。
(イ) 柱及び梁主筋並びに耐力壁を除く鉄筋の重ね継手の長さは、表3.1による。

表3.1 鉄筋の重ね継手の長さ

鉄筋の種類	コンクリートの設計基準強度 F_c (N/mm ²)	L (フックなし)		L_{1b} (フックあり)	
		小梁	スラブ	小梁	スラブ
S0295	18	45d	30d	35d	30d
	21	40d	30d	30d	25d
	24, 27	35d	30d	25d	25d
	30, 33, 36	35d	25d	25d	25d
S0345	18	50d	35d	35d	30d
	21	45d	30d	30d	30d
	24, 27	40d	30d	30d	30d
	30, 33, 36	35d	25d	25d	25d
S0390	21	50d	35d	35d	30d
	24, 27	45d	35d	35d	30d
	30, 33, 36	40d	30d	30d	30d

- (注) 1. L 、 L_{1b} : フックなし重ね継手の長さ及びフックあり重ね継手の長さ。
2. フックありの場合の L_{1b} は、図3.1に示すようにフック部分 Q を含まない。
3. 軽量コンクリートの場合は、表の値に 5d を加えたものとする。

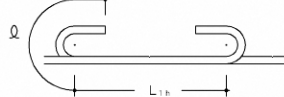


図3.1 フックありの場合の重ね継手の長さ

- (ウ) 耐力壁の鉄筋の重ね継手の長さは、フックありなしにかかわらず 40d以上（軽量コンクリートの場合は 50d以上）と表3.1の重ね継手の長さのうちいずれか大きい値とする。
(エ) 隣り合う継手の位置は、表3.2による。
ただし、スラブ筋で D16 以下の場合及び壁筋の場合は除く。

表3.2 隣り合う継手の位置

重ね継手	フックありの場合		フックなしの場合	
	L_{1b}	L_{1b}	L_1	L_1
ガス圧接継手	$a \geq 0.5L_{1b}$	$a \geq 0.5L_{1b}$	$a \geq 0.5L_1$	$a \geq 0.5L_1$
	$a \geq 400\text{mm}$	$a \geq 400\text{mm}$	$a \geq 400\text{mm}$	$a \geq 400\text{mm}$

- (2) 鉄筋の定着
(ア) 鉄筋の定着の長さは、表3.3及び図3.2による。

表3.3 鉄筋の定着の長さ

鉄筋の種類	コンクリートの設計基準強度 F_c (N/mm ²)	直線定着の長さ				フックあり定着の長さ			
		L_1	L_2	小梁	スラブ	L_{1b}	L_{2b}	小梁	スラブ
S0295	18	45d	40d	10d	35d	30d	10d	30d	
	21	40d	35d	10d	30d	25d	10d	25d	
	24, 27	35d	30d	10d	25d	20d	10d	20d	
	30, 33, 36	35d	30d	10d	25d	20d	10d	20d	
S0345	18	50d	40d	150mm 以上	35d	30d	10d	30d	
	21	45d	35d	150mm 以上	30d	25d	10d	25d	
	24, 27	40d	35d	150mm 以上	30d	25d	10d	25d	
	30, 33, 36	35d	30d	150mm 以上	25d	20d	10d	20d	
S0390	21	50d	40d	(25d以上)	35d	30d	10d	30d	
	24, 27	45d	40d	(25d以上)	35d	30d	10d	30d	
	30, 33, 36	40d	35d	(25d以上)	30d	25d	10d	25d	

- (注) 1. L_1 、 L_{1b} : 2. から4. までの直線定着の長さ及びフックあり定着の長さ。
2. L_2 、 L_{2b} : 割製基礎のおそれのない箇所への直線定着の長さ及びフックあり定着の長さ。
3. L_3 : 小梁及びスラブの下端筋の直線定着の長さ。ただし、基礎耐力スラブ及びこれを受ける小梁を除く。
なお、() は片持ち小梁及び片持ちスラブの場合を示す。
4. L_{3b} : 小梁の下端筋のフックあり定着の長さ。
5. フックあり定着の場合は、図3.2に示すようにフック部分 Q を含まない。また、中間部での折曲げは行わない。
6. 軽量コンクリートの場合は、表の値に 5d を加えたものとする。

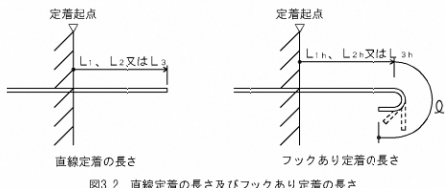


図3.2 直線定着の長さ及びフックあり定着の長さ

- (イ) 梁主筋の柱内折曲げ定着又は小梁及びスラブの上端筋の梁内折曲げ定着の方法は、図3.3により、次の(a)、(b)及び(c)をすべて満足するものとする。
(a) 全長は表3.3に示す直線定着の長さ以上
(b) 余長は 8d 以上
(c) 仕口面から鉄筋外面までの投影定着長さ L_a 及び L_b は表3.4に示す長さとする。ただし、梁主筋の柱内定着においては、原則として、柱せいの3/4倍以上とする。

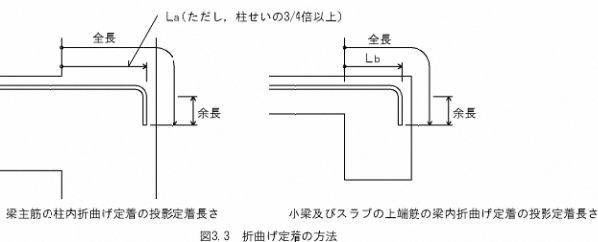


図3.3 折曲げ定着の方法

表3.4 鉄筋の投影定着の長さ

鉄筋の種類	コンクリートの設計基準強度 F_c (N/mm ²)	L_a	L_b
S0295	18	20d	15d
	21	15d	15d
	24, 27	15d	15d
	30, 33, 36	15d	15d
S0345	18	20d	20d
	21	20d	20d
	24, 27	20d	15d
	30, 33, 36	15d	15d
S0390	21	20d	20d
	24, 27	20d	20d
	30, 33, 36	20d	15d

- (注) 1. L_a : 梁主筋の柱内折曲げ定着の投影定着長さ。（基礎梁、片持ち梁及び片持ちスラブを含む。）
2. L_b : 小梁及びスラブの上端筋の梁内折曲げ定着の投影定着長さ。（片持ち小梁及び片持ちスラブを除く。）
3. 軽量コンクリートの場合は、表の値に 5d を加えたものとする。

- (ウ) 溶接金網の継手及び定着は、図3.4による。
なお、 L_1 は表3.1に、 L_2 及び L_3 は表3.3による。

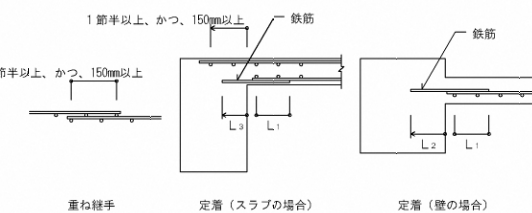


図3.4 溶接金網の継手及び定着

- (4) スパイラル筋の継手及び定着は、図3.5による

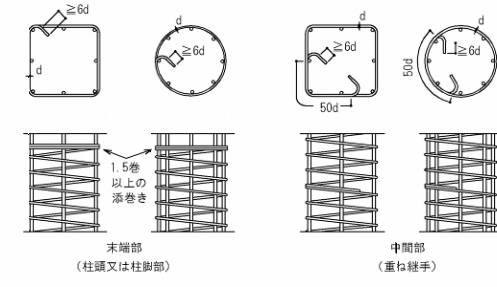


図3.5 スパイラル筋の継手及び定着

4 鉄筋の最小かぶり厚さ及び間隔

- (1) 鉄筋及び溶接金網の最小かぶり厚さは、表4.1による。
ただし、柱及び梁の主筋に D29 以上を使用する場合は、主筋のかぶり厚さを径の1.5倍以上確保するように最小かぶり厚さを定める。

構造部分の種類			最小かぶり厚さ(mm)	
土に接しない部分	スラブ	仕上げあり	20	
		仕上げなし	30	
	柱、梁、耐力壁	屋内	仕上げあり	30
		屋内	仕上げなし	30
		屋外	仕上げあり	30
		屋外	仕上げなし	40
壁、耐力スラブ			40	
柱、梁、スラブ、壁			40	
基礎、埋置、耐力スラブ			60	
煙突等熱を受ける部分			60	

- (注) 1. この表は、普通コンクリートに適用し、軽量コンクリートには適用しない。また、塩害を受けるおそれのある部分等耐久性上不利な箇所には適用しない。
2. 「仕上げあり」とは、モルタル塗り等の仕上げのあるものとし、鉄筋の耐久性上有効でない仕上げ（仕上り材、塗料等）のものを除く。
3. スラブ、梁、基礎及び壁等に、直接土に接する部分のかぶり厚さは、捨コンクリートの厚さを含まない。
4. 杭基礎の場合の基礎下端筋のかぶり厚さは、杭先端からとする。
(2) 柱、梁等の鉄筋の加工に用いるかぶり厚さは、最小かぶり厚さに10mmを加えた数値を標準とする。
(3) 鉄筋組立後のかぶり厚さは、最小かぶり厚さ以上とする。
(4) 鉄筋相互のあきは図4.1により、次の値のうち最大のものを以上とする。
(ア) 軸骨材の最大寸法の1.25倍
(イ) 25mm
(ウ) 隣り合う鉄筋の径（呼び名の数値）の平均の1.5倍

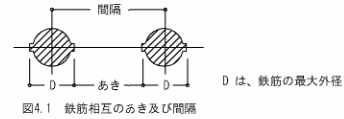


図4.1 鉄筋相互のあき及び間隔

- (5) 鉄骨鉄筋コンクリート造の場合、主筋と平行する鉄骨とのあきは、(4)による。
(6) 貫通孔に接する鉄筋のかぶり厚さは、最小かぶり厚さ以上とする。

5.1 基礎梁

- (1) 一般事項

- (ア) 梁筋は、連続端で柱に接する梁筋が同数の時に柱をまわって引き通すものとし、鉄筋の本数が異なる場合には、図5.1のように対称の梁に定着する。外端部や隅部では、折り曲げて定着する。
(イ) 梁筋を柱内に定着する場合は、7.1(2)(イ)による。

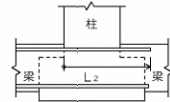
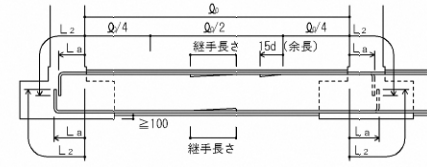


図5.1 梁筋の基礎梁内への定着

- (b) 独立基礎で基礎梁にスラブが付かない場合の主筋の継手、定着及び余長は、図5.2による。



- (注) 1. 図示のない事項は、7.1による。
2. 印は、継手及び余長位置を示す。
3. 破線は、柱内定着の場合を示す。
4. 梁主筋のみ込み長さ（柱せいの3/4倍以上）

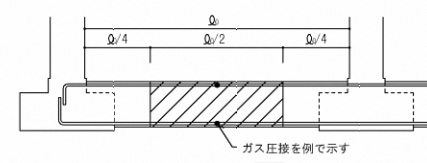
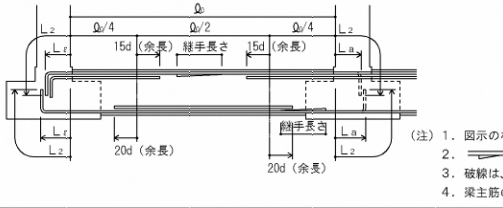


図5.2 主筋の継手、定着及び余長（その1）

- (3) 独立基礎で基礎梁にスラブが付く場合の主筋の継手、定着及び余長は、図5.3による。ただし、耐力スラブが付く場合は、(4)による。



- (注) 1. 図示のない事項は、7.1による。
2. 印は、継手及び余長位置を示す。
3. 破線は、柱内定着の場合を示す。
4. 梁主筋のみ込み長さ（柱せいの3/4倍以上）

工事名	東篤宮駅東口立体施設整備工事（建築）
路線名 河川名	市道篤宮76号線
工事箇所	久喜市様田1丁目地内
図面名	構造関係共通図（配筋標準図・その1）
縮尺	S= 図示 図面番号 S - 1
埼玉県 久喜市 都市整備課	

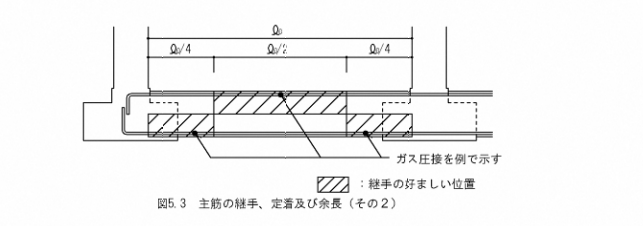


図5.3 主筋の継手、定着及び余長（その2）

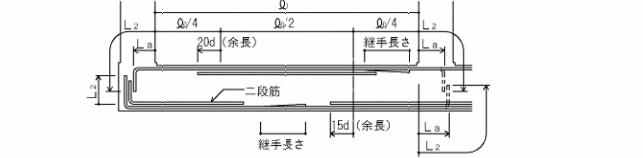


図5.4 主筋の継手、定着及び余長（その3）

5.2 基礎梁のあばら筋等

- (1) 一般事項
 - (ア) あばら筋の径および間隔は、設計図による。
 - (イ) あばら筋組立の形及びフックの位置は、7.2(2)による。また、副あばら筋組立の形及びフックの位置は7.2(3)による。ただし、梁の上下端にスラブが付く場合で、かつ、梁せいが1.5m以上の場合は、図5.5によることができる。

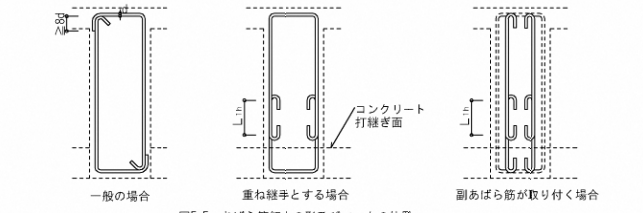


図5.5 あばら筋組立の形及びフックの位置

- (2) 腹筋及び横止め筋は、7.2による。ただし、梁せいが1.5m以上の場合は設計図による。
- (3) あばら筋の割付けは、7.2(4)による。

6.1 柱

- (1) 一般事項
 - (ア) 継手中心位置は、梁上端から500mm以上、1,500mm以下、かつ、 $3ho/4$ (ho は柱の内法高さ) 以下とする。
 - (イ) 継手、定着及び余長は、図6.1による。ただし、柱頭定着長さ L_2 が確保できない場合は、設計図による。

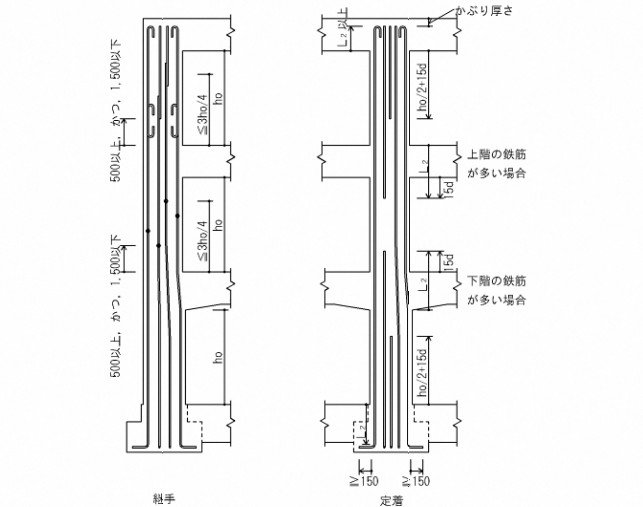


図6.1 柱主筋の継手、定着及び余長

- (2) 柱打増し部
 - (ア) 打増し部分に、壁、梁及びスラブ等がとつりく場合は、壁、梁及びスラブ筋等の定着長さには、打増し部分を含まない。
 - (イ) 土に接する柱周囲の打増しは図6.2による。

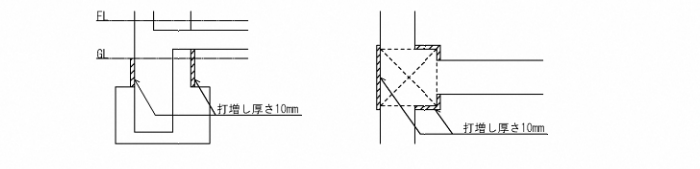


図6.2 柱打増し部

6.2 帯筋

- (1) 帯筋の種類及び間隔は、設計図による。
- (2) 帯筋組立の形は図6.3により、適用は構造図による。構造図に記載がなければ次による。
 - (ア) 形は、図6.3(イ)とする。ただし、H形の135°曲げのフックが困難な場合は、W-I形とする。
 - (イ) 溶接する場合の溶接長さ L は、両面重ねアーク溶接の場合は5d以上、片面重ねアーク溶接の場合は10d以上とする。
 - (ウ) S P形において、柱頭及び柱脚の端部は1.5巻以上の添巻きを行う。

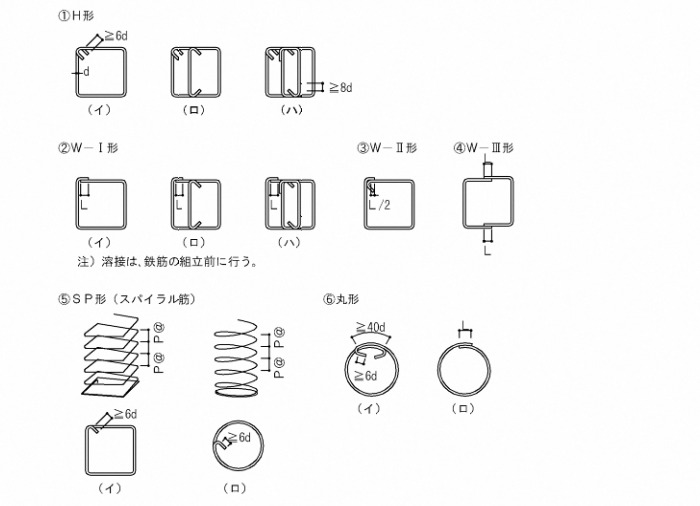


図6.3 帯筋組立の形

- (3) フック及び継手の位置は交互とする。
- (4) 帯筋の割付けは図6.4とし、それ以外の場合は設計図による。

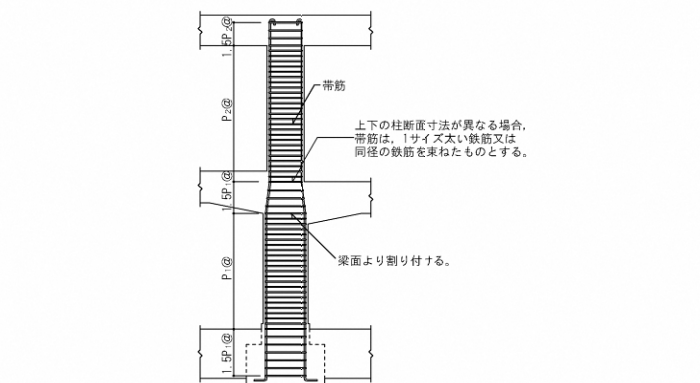


図6.4 帯筋の割付け

7.1 大梁

- (1) 一般事項
 - (ア) 梁の上がり下がりには、 L_2 を基準とした寸法とする。
 - (イ) 地中梁下の砂利地層厚及び捨てコンクリート地層厚は設計図による。
 - (ウ) 打増し部分に、スラブ、壁、梁筋等が取り付く場合は、スラブ、壁、梁筋等の定着長さには、打増し部分を含まない。

- (2) 大梁主筋の継手及び定着の一般事項
 - (ア) 継手中心位置は、次による。
 - 上端筋：中央 $Q/2$ 以内
 - 下端筋：柱面より梁せい (D) 以上離し、 $Q/4$ を加えた範囲以内
 - (イ) 継手中央部の位置、定着長さ及び余長は図7.3及び図7.4による。
 - (ウ) 梁筋は、連続軸で柱に接する主筋が、同数の時は柱をまたいで引き通すものとし、鉄筋の本数が異なる場合には、図7.1のように反対側方に定着する。外端部や隅部では、折り曲げて定着する。

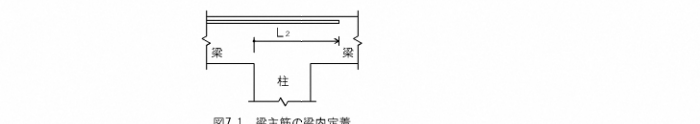


図7.1 大梁主筋の梁内定着

- (エ) 梁主筋を柱内に折り曲げて定着する場合は次による。なお、定着の方法は3(2)(イ)による。
 - 上端筋：曲げ降ろす
 - 下端筋（一般）：原則、曲げ上げる。
 - 下端筋（ハンチ付き）：原則、曲げ上げる。
- (オ) 梁にハンチをつける場合、その傾斜は設計図による。
- (カ) 段違い梁は、図7.2による。

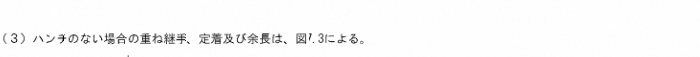


図7.2 段違い梁

- (3) ハンチのない場合の重ね継手、定着及び余長は、図7.3による。

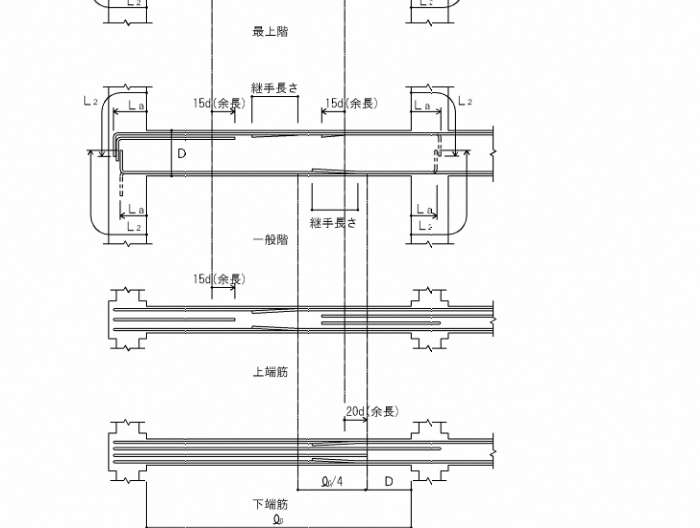


図7.3 大梁の重ね継手、定着及び余長

- (4) ハンチのある場合の定着及び余長は、図7.4による。

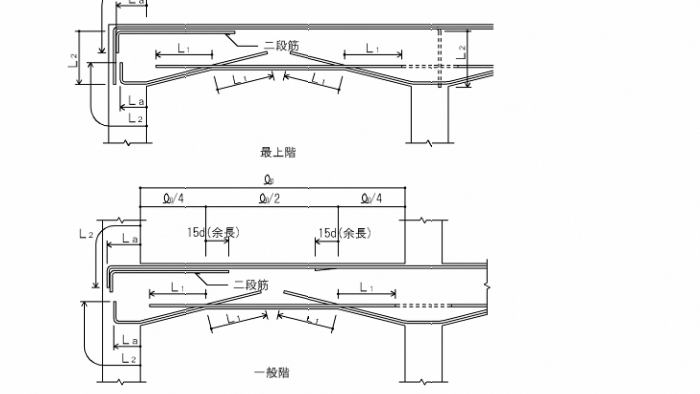


図7.4 ハンチのある大梁の定着及び余長

7.2 あばら筋等

- (1) あばら筋、腹筋及び横止め筋の一般事項
 - (ア) あばら筋の種類、径及び間隔は、設計図による。
 - (イ) 腹筋に継手を設ける場合の継手長さは、150mm程度とし、定着長さは図7.6による。ただし、腹筋を計算上考慮している場合の継手長さ、定着長さは設計図による。
 - (ウ) 横止め筋及び受け用横止め筋は、 $D10-1,000@$ 程度とする。

- (2) あばら筋組立の形及びフックの位置
 - (ア) 形は、図7.5(1)とする。ただし、L形梁の場合は、(2) または (3)、T形梁の場合は (2) ~ (4) とすることができる。

- (イ) フックの位置
 - (a) (1)の場合は交互とする。
 - (b) (2)の場合 L形ではスラブの付く側、T形では交互とする。
 - (c) (3)の場合は床版の付く側を90°折曲げとする。

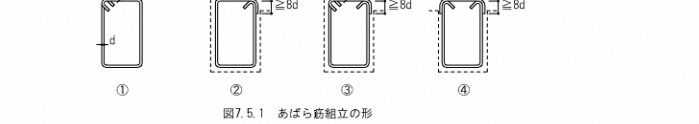


図7.5.1 あばら筋組立の形

- (3) 副あばら筋組立の形及びフックの位置
 - (ア) 形は、図7.5.2(5) または (6) とする。ただし、L形梁またはT形梁の場合は (7) とすることができる。

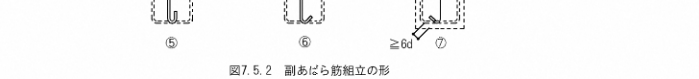


図7.5.2 副あばら筋組立の形

- (4) あばら筋の割付け
 - (ア) 間隔が一律でハンチのない場合は、図7.6による。

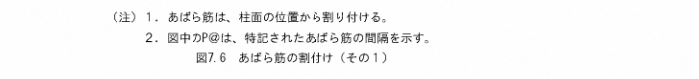


図7.6 あばら筋の割付け（その1）

- (イ) 間隔が一律でハンチのある場合は、図7.7による。

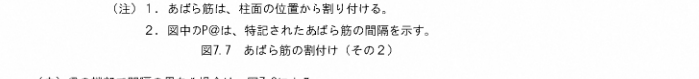


図7.7 あばら筋の割付け（その2）

- (ウ) 梁の端部で間隔の異なる場合は、図7.8による。

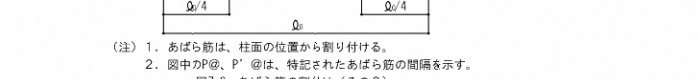


図7.8 あばら筋の割付け（その3）

- (5) 腹筋及び横止め筋
 - 一般の梁は、図7.9による。

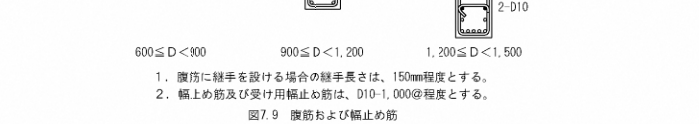


図7.9 腹筋および横止め筋

7.3 小梁

- (1) 小梁主筋の継手、定着及び余長
 - 連続小梁の場合は、図7.10による。

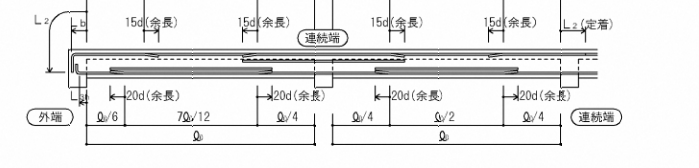
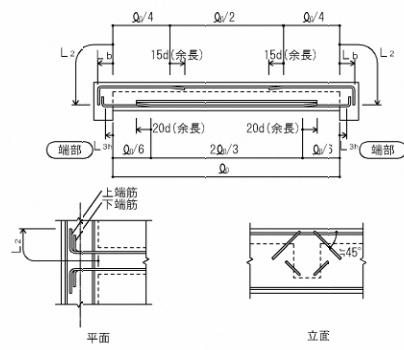


図7.10 小梁主筋の継手、定着及び余長（その1）

工事名	東鷲宮駅東口立体施設整備工事（建築）
路線名	市道鷲宮76号線
工事箇所	久喜市桜田1丁目地内
図面名	構造関係共通図（配筋標準図・その2）
縮尺	S= 図示 図面番号 S-2
埼玉県 久喜市 都市整備課	

(2) 単独小梁の場合は、図7.11による。



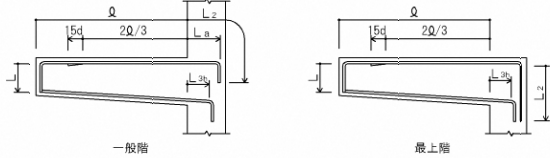
直交する梁へ斜めに定着する場合
 (注) 1. 図示のない事項は、5.1及び7.1に準ずる。
 2. 印は、余長位置を示す。
 図7.11 小梁主筋の継手、定着及び余長(その2)

(3) あばら筋は、7.2による。

7.4 片持梁

(1) 片持梁主筋の定着及び余長

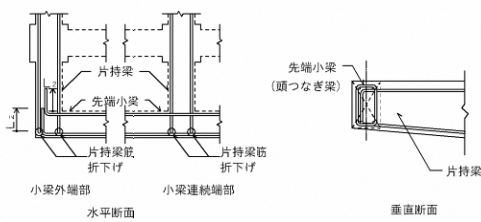
(ア) 先端に小梁のない場合は、図7.12による。



一般階
 最上階
 (注) 1. 図示のない事項は、7.1による。
 2. 印は、余長位置を示す。
 3. 先端の折曲げの長さ l_1 は、梁せいからかぶり厚さを除いた長さとする。

図7.12 片持梁主筋の定着及び余長

(イ) 先端に小梁がある場合は、図7.13による。



小梁外端部
 小梁連続端部
 水平断面
 垂直断面
 (注) 1. 図示のない場合は、(ア)による。
 2. 先端小梁終端部の主筋は、片持梁内に水平定着する。
 3. 先端小梁の連続端は、片持梁の先端を貫通する通し筋としてよい。

図7.13 片持梁主筋の定着

(2) あばら筋は、7.2による。

8.1 壁

(1) 一般事項

(ア) 一般壁筋の重ね継手の長さは l_1 とし、耐力壁筋の重ね継手長さは特記による。また定着の長さは l_2 とし、鉄筋の継手位置は、柱・梁部以外とする。
 (イ) 幅止め筋は、縦横ともD10-1,000程度とする。
 (ウ) 打増し部分に、壁及びスラブ等が取り付く場合は、壁及びスラブ等の定着長さには打増し部分は含まない。

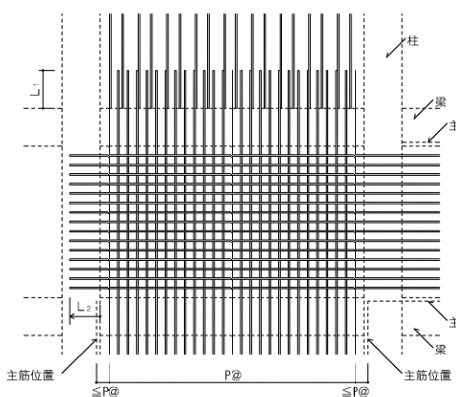


図8.1 壁の配筋 (注) 図中のP@は、特記された壁筋の間隔を示す。

(2) 壁の配筋は表8.1により、種別は設計図による。

表8.1 壁の配筋

種別	縦筋及び横筋	断面図 (mm)
W1C	D10-200#シングル	120
W1EA	D10-150#シングル	150
W1EB	D10-100#シングル	150
W16A	D10-200#ダブル	180
W16B	D10-150#ダブル	180
W2CA	D10-200#ダブル	200
W2CB	D10-150#ダブル	200

(注) 壁筋の配筋順序は、規定しない。

(3) 片持スラブ階段を受ける壁の配筋は表8.2により、種別は設計図による。

表8.2 片持スラブ階段を受ける壁の配筋

種別	縦筋及び横筋	断面図 (mm)	階段の配筋種別(表10.1)
KW	縦筋	D13-200#ダブル	KA1 KA3
	横筋	D10-200#ダブル	
KW2	縦筋	D13-150#ダブル	KA2 KA4
	横筋	D10-200#ダブル	

(注) 縦筋は、横筋の外側に配筋する。

(4) 土圧を受ける壁の配筋は、設計図による。

(5) 壁の交差部及び端部の配筋は、図8.2による。

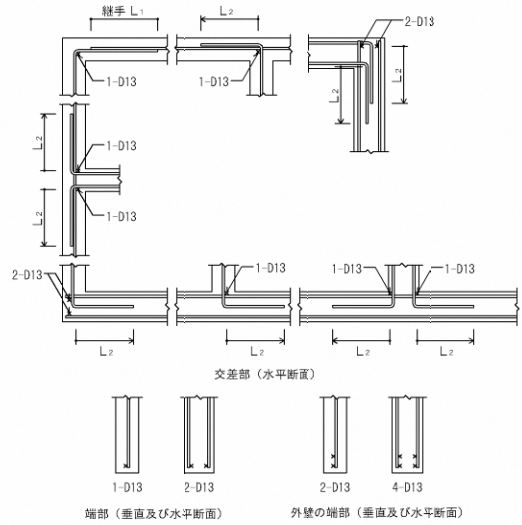


図8.2 壁の交差部及び端部の配筋

8.2 一般壁の補強

(1) 壁開口部の補強

(ア) 耐力壁を除く壁開口部の補強筋は、A形は表8.3、B形は表8.4とし、適用は構造図による。なお、耐力壁の補強筋は、構造図による。

表8.3 壁開口部補強筋(A形)

壁の種類	補強筋
W12, W15	縦横 1-D13 斜め 1-D13
W18, W20	縦横 2-D13 斜め 2-D13

表8.4 壁開口部補強筋(B形)

壁の種類	補強筋
W12, W15	縦横 2-D13 斜め 1-D13
W18, W20	縦横 4-D13 斜め 2-D13

(イ) 壁開口部補強の定着長さは、図8.3による。

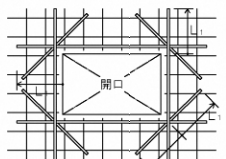


図8.3 壁開口部補強筋の定着長さ

(2) コンセントボックス等を壁に埋め込む場合の補強は、設計図による。

9.1 スラブ

(1) スラブ及び土間コンクリートの上り下りりは、FLを基準とした寸法とする。
 (2) 土間スラブ下の砂利地床厚及び捨てコンクリート厚は設計図による。
 (3) 土間コンクリート補強筋(D0)の配筋及びコンクリート厚さは設計図による。
 (4) スラブの配筋(S形配筋)は表9.1及び図9.1により、配筋種別及びスラブ厚さは、設計図による。

表9.1 S形配筋

配筋種別	短辺方向(主筋) 全域		長辺方向(配力筋) 全域	
	短辺方向(主筋) 全域	長辺方向(配力筋) 全域	短辺方向(主筋) 全域	長辺方向(配力筋) 全域
S 1	D13-100#	D13-100#	S 8	D10, D13-50#
S 2	同上	D13-150#	S 9	同上
S 3	同上	D10, D13-150#	S10	D10, D13-200#
S 4	D13-150#	D13-150#	S11	同上
S 5	同上	D10, D13-150#	S12	同上
S 6	同上	D10-150#	S13	D10-200#
S 7	D10, D13-150#	D10, D13-150#	S14	同上

(注) 上端筋、下端筋とも同一配筋とする。

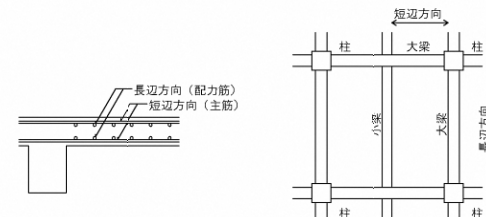


図9.1 スラブの配筋

(5) 配筋の削付けは、中央から行い、端部は定められた間隔以下とする。
 (6) 原則として引き渡し、鉄筋の重ね継手長さは l_1 とする。
 (7) 定着長さ及び受け筋は、図9.2による。ただし、引き通すことができない場合は、図9.3により梁内に定着する。

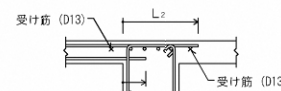


図9.2 スラブ筋の定着長さ及び受け筋(その1)

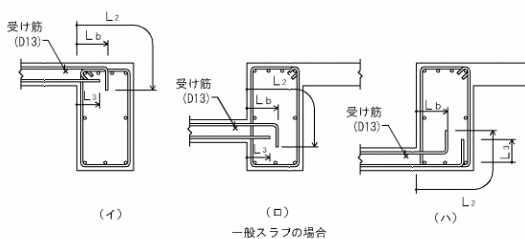


図9.3 スラブ筋の定着長さ及び受け筋(その2)

9.2 片持スラブ

片持スラブは、プレキャストコンクリート部材又は現場打ちコンクリート部材とする。プレキャストコンクリート部材とする場合の躯体への接続方法は、設計図による。片持スラブの配筋は、次による。

(1) 片持スラブの配筋(CS形配筋)は、表9.2並びに図9.4及び図9.5により、配筋種別及びスラブ厚さは、設計図による。

表9.2 CS形配筋

配筋種別	主筋		配筋種別	主筋	
	上	下		上	下
CS1	上	D13-100#	CS5	上	D10-200#
	下	D13-200#		下	D10-400#
CS2	上	D13-150#	CS6	上	D10, D13-200#
	下	D13-300#		下	—
CS3	上	D10, D13-150#	CS7	上	D10-200#
	下	D10, D13-300#		下	—
CS4	上	D10, D13-200#			
	下	D10-200#			

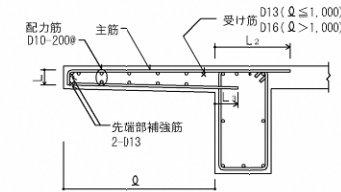


図9.4 片持スラブの配筋 (CS1からCS15)

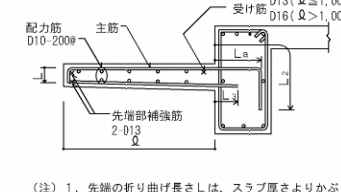


図9.5 片持スラブの配筋 (CS16及びCS17)

(2) 先端に壁が付く場合の配筋は、図9.6による。

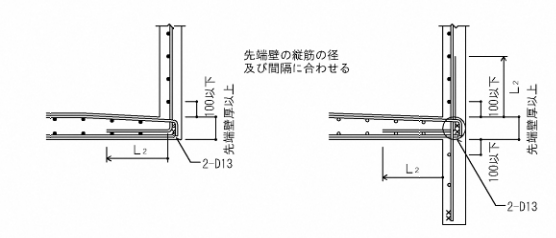
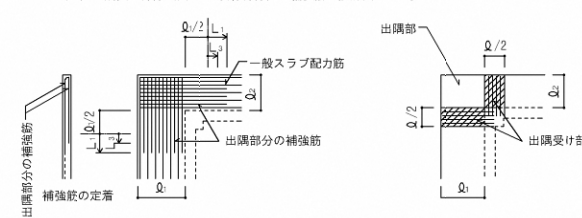


図9.6 先端に壁が付く場合の配筋

(3) 出隅部

(ア) 出隅部の補強筋は設計図により、配筋方法は、図9.7による。
 (イ) 出隅受け部分(図9.7の斜線部分)の補強筋は設計図による。



(注) $l_1 \geq \lambda$ とする

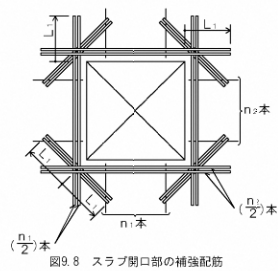
(注) 1. $\lambda \geq \lambda$ とする
 2. 出隅受け部配筋は柱又は梁にL定着する。
 出隅受け部配筋

図9.7 片持スラブ出隅部の補強筋

工事名	東鷲宮駅東口立体施設整備工事(建築)
路線名	市道鷲宮76号線
工事箇所	久喜市桜田1丁目地内
図面名	構造関係共通図(配筋標準図・その3)
縮尺	S= 図示 図面番号 S-3
埼玉県 久喜市 都市整備課	

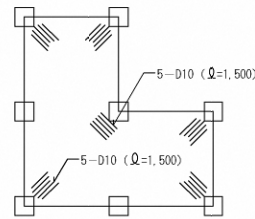
9.3 スラブ等の補強

- (1) スラブ開口部の補強
スラブ開口部の補強方法は、設計図による。設計図になければ、(ア)イによる。
(ア) スラブ開口部の最大径が700mm以下の場合は、図9.8により開口部によって切られる鉄筋と同量の鉄筋で周囲を補強し、隅角部に斜め方向に2-D13 (Q=2L) シングルを上下筋の内側に配筋する。

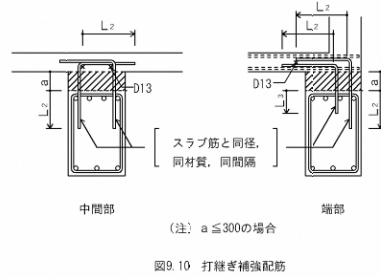


- (イ) スラブ開口部の最大径が両方向の配筋間隔以下で、鉄筋を緩やかに曲げるにより、開口部を避けて配筋できる場合は、補強を省略することができる。

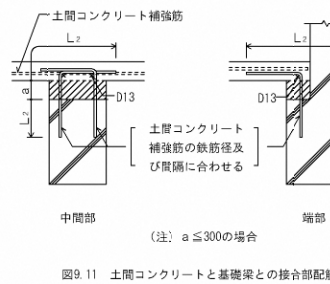
- (2) 屋根スラブの補強
屋根スラブの出隅及び入隅部分には、図9.9により、補強筋を上端筋の下側に配置する。



- (3) 土間スラブの打継ぎ補強
基礎梁とスラブを一体打ちとし、打継ぎを設ける場合の補強は図9.10による。ただし、土間スラブとは、土に接するスラブでS形の配筋によるものをいう。



- (4) 土間コンクリートの補強
土間コンクリートの補強筋は、設計図による。なお、基礎梁との接合部は、図9.11による。

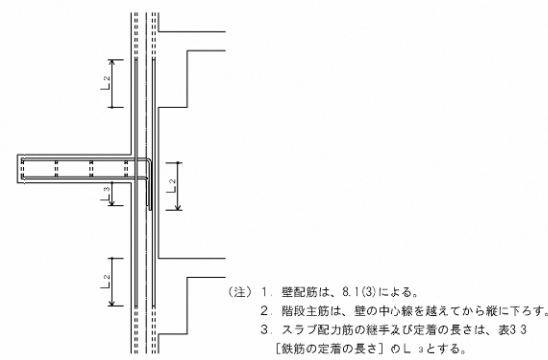


10.1 片持スラブ形階段

片持スラブ形階段の配筋は、表10.1及び図10.1により、寸法及び配筋種別は、設計図による。

配筋種別	KA1	KA2
配筋図		
配筋種別	KA3	KA4
配筋図		

注：t: スラブ厚さ



- (注) 1. 壁配筋は、8.1(3)による。
- 2. 階段主筋は、壁の中心線を越えてから壁に下る。
- 3. スラブ配筋の継手及び定着の長さは、表3.3 [鉄筋の定着の長さ]のL₂とする。

10.2 二辺固定スラブ形階段

二辺固定スラブ形階段は、プレキャストコンクリート部材又は現場打ちコンクリート部材とする。プレキャストコンクリート部材とする場合の継手への接続方法は設計図による。

二辺固定スラブ形階段の配筋は表10.2並びに図10.2及び図10.3により、寸法及び配筋種別は、設計図による。

表10.2 二辺固定スラブ形階段

配筋種別	上端筋、下端筋とも (全或)
KB1	D13-200#
KB2	D13-150#
KB3	D13-100#
KB4	D13, D16-150#
KB5	D16-150#
KB6	D16-125#
KB7	D16-100#

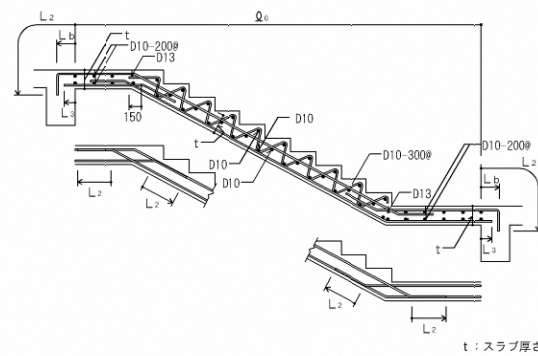
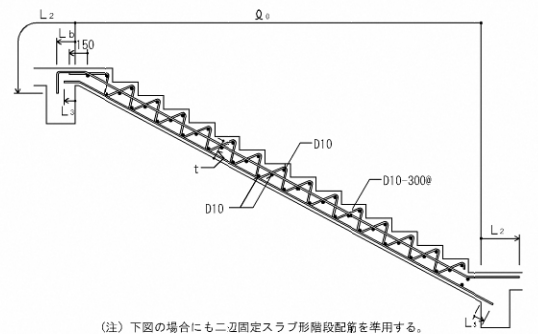


図10.2 二辺固定スラブ形階段配筋 (その1)



- (注) 下図の場合にも二辺固定スラブ形階段配筋を準用する。

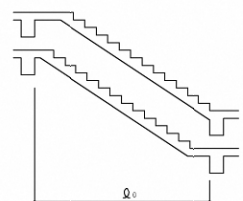


図10.3 二辺固定スラブ形階段配筋 (その2)

11.1 梁貫通孔

- (1) 梁貫通孔は、次による。
- (ア) 梁貫通孔補強筋の名称等は、図11.1による。
- (イ) 孔の径は、梁せいの1/3以下とする。
- (ウ) 孔の上下方向の位置は、梁せい中心付近とし、梁中央部下端は梁下端よりD/3 (Dは梁せい)の範囲には設けてはならない。
- (エ) 孔は、柱面から原則として、1.5D以上設ける。ただし、基礎梁及び壁付帯梁を除く。
- (オ) 孔が並列する場合の中心間隔は、孔の径の平均値の3倍以上とする。
- (カ) 縦筋及び上下縦筋は、あばら筋の形に配筋する。
- (キ) 補強筋は、主筋の内側とする。また、鉄筋の定着長さは、図11.2による。
- (ク) 孔の径が梁せいの1/10以下、かつ、150mm未満のものは、鉄筋を緩やかに曲げるにより、開口部を避けて配筋でき、かつ、設計図に特記された場合において、補強を省略することができる。
- (ケ) 溶接金網の余長は、1格子以上とし、突出しは10mm以上とする。
- (コ) 溶接金網の貫通孔部分には、鉄筋1-13φのリング筋を取り付ける。なお、リング筋は、溶接金網に4箇所以上溶接する。
- (ク) 溶接金網の剪付け始点は、横筋ではあばら筋の下側とし、縦筋では貫通孔の中心とする。
- (シ) 他の開孔を設けない範囲は、図11.3による。

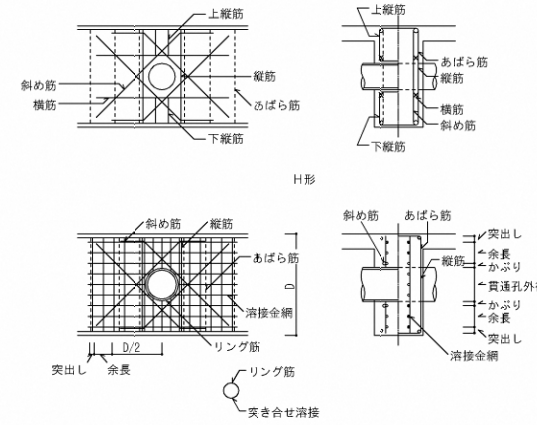


図11.1 梁貫通孔補強筋の名称等

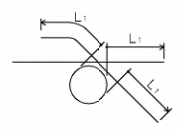


図11.2 補強筋の定着長さ

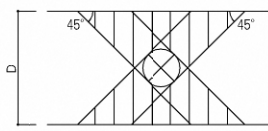


図11.3 他の開孔を設けない範囲

- (2) 梁貫通孔の補強形式は表11.1~表11.2により、配筋種別は設計図による。

表11.1 H形配筋

配筋種別	斜め筋	縦筋	横筋	上下縦筋	配筋図
H1	なし	なし	なし	なし	
H2	2-2-D13	なし	なし	なし	
H3	4-2-D13	2-2-D13	2-2-D13	2-2-D13	
H4	4-2-D16	なし	なし	なし	
H5	4-2-D16	なし	なし	なし	
H6	4-2-D19	4-2-D13	2-2-D13	3-2-D13	
H7	4-2-D22	なし	なし	なし	

- (注) は、一般部分のあばら筋を示す。

表11.2 剛形配筋

配筋種別	斜め筋	縦筋	溶接金網	配筋図
MH1	2-2-D13	なし	なし	
MH2	2-2-D13	2-2-D13	なし	
MH3	2-2-D13	なし	なし	
MH4	4-2-D13	2-2-D13	2-6φ-100#	
MH5	4-2-D16	なし	なし	
MH6	4-2-D16	なし	なし	
MH7	4-2-D19	4-2-D13	2-6φ-100#	

- (注) は、一般部分のあばら筋を示す。

11.2 コンクリートブロック横壁との取合い

- (1) 控壁は、次による。
- (ア) 控壁の配筋は、設計図による。
- (イ) 配筋は、図11.4による。

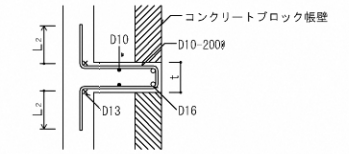


図11.4 控壁の配筋 (水平、垂直とも)

- (2) 横壁が土間コンクリート上に設置される場合の補強は、図11.5による。

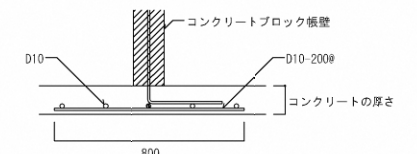


図11.5 壁付き土間コンクリートの補強配筋

11.3 バラベットの

バラベットの先端補強筋は図11.6により、コンクリート厚さ及び配筋は構造図による。

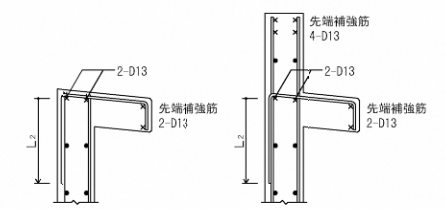


図11.6 バラベットの先端補強筋

12 擁壁

宅地造成等規制区域外での高さ2m以下の擁壁の鉄筋の定着長さは図12により、コンクリートの厚さ及び配筋は構造図による。

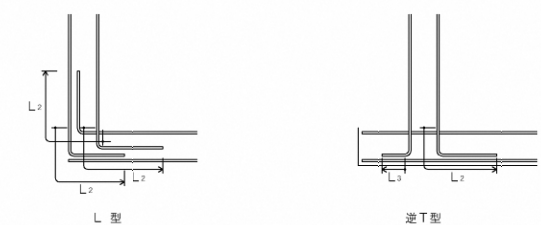


図12 擁壁の鉄筋の定着長さ

工事名	東篤宮駅東口立体施設整備工事 (建築)
路線名	市道篤宮76号線
河川名	
工事箇所	久喜市桜田1丁目地内
図面名	構造関係共通図 (配筋標準図・その4)
縮尺	S= 図示
図面番号	S-4
埼玉県 久喜市 都市整備課	